

さいほうとうしゅう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂 尊

第六回

9章 不夜城・適塾

弘化二年（一八四五）

洪庵こうあん てんぼうは天保九年（一八三八）四月、瓦町かわらまちに適塾てきじゅくを開いた。ところが塾生が増えたために手狭てせまとなったため、弘化二年（一八四五）、八つの通りの北にある過書町かじよの町屋を購入して、足かけ八年いた瓦町から引越した。

その屋敷の二軒隣は、洪庵が蘭学を学び始めた頃、シーボルトとお目通りした、銅座どうざである。自分の原点のような土地に居を構えることができ、洪庵は気持ちが高揚した。

大坂では士族は土地を購入できない決まりなので、舅しゅうと おくかわひやの億川百記いきに一肌脱いでもらい、億川家の元使用人で、過書町で薬種業を営んでいた名塩屋熊太郎なじおやくまたろうを名義人にした。

両替商の天王寺屋てんのうじやの別邸だった町家は大層立派な造りで、かなり高額だった。

少し躊躇ちゆうちゆうしたが、介添かいぞえの大和屋やまとの「適塾ていじくは評判がええさかいに、これからも塾生がようけ入って、またすぐに手狭てんぎになりまっせ」という声に背を押されて決断した。

大坂で蔵屋敷を仕切っていた足守あしもりの父に「それはお買い得の物件だ」と言われたので、商売取引に不案内な洪庵は胸をなで下ろした。

長崎貿易を仕切る住友家の銅座べつしどうざんも隣にあり、別子銅山べつしどうざんから銅が運び込まれて賑わっている。

シーボルトに医の本懐ほんかいについて質問した、洪庵の原点のような場所でもある。町人の学塾がくじくである「懷徳堂かいとくどう」もすぐ近所だ。

町屋造りは、間口は狭いが縦長で、奥行きが深い矩形くけいになっている。「うなぎの寝床ねとこ」といわれる。三階建てが許されず、庇ひさしには平瓦ひらがわらを使用する瓦葺かわらぶきが推奨された。表通りに面した土間の奥には京風の通り庭があり、中庭から奥を家族の住居として、店の間と区別した。

井戸は飲料水には向かず、洗い物に使う。飲料水は川の水を汲んで、大きな壺つぼにたくわえた。台所には、かまどがあり、焚口たきぐちが三つある。「三つへっつい」が備わっている。

二階に上がる急な階段は、側面に抽斗ひきだしが作り付けられた段梯子だんばしこと呼ばれる使い勝手のいいもので、細々した品をたっぷり収納できるようにになっている。

二階の上の物干し台は風が通り見晴らしもよく、そこからは橋を隔てた向かいの中之島に、憧れの合水堂を望むことができた。

立地は申し分ないが、蘭学者への反感を露わにする譜代・彦根藩の井伊家の大坂蔵屋敷が背中合わせにあることが少し気になった。

大老という名誉職を輩出している彦根藩の西洋嫌いは、世に鳴り響いていたからである。

気がかりは他にもあった。引越す前年の七月、洪庵は突然大坂奉行から呼び出され、人相書きを見せられた。「蛮社の獄」で永牢を申し渡された高野長英は、入牢二年目の天保十二年（一八四一）、牢名主に祭り上げられた。その頃は牢内で「蛮社遭厄小記」を執筆したりして、相変わらず意気は盛んだったという。だがこの三年後の弘化元年（一八四四）六月末、伝馬町の獄舎が火災になった時、三日間限りの赦免をされると、それに乗じて逃亡してしまった。「長崎留学の縁の故、浪速に逃げ込むやもしれぬ。見つけた際は必ず奉行所に一報されよ」と厳しく申し渡された。

その昔、長英の開塾を手伝った泰然が「長英先生は大きなことを考え、お上の批判を繰り返し、地道な蘭学修得に役立つようなご教示は、なかなかしていただけないので、ほとほと困り果てておる」などと愚痴をこぼしていたことを、洪庵は思い出した。

——それにしても脱獄とはまた、思い切ったことを……。

やはり私は長英殿や泰然殿とは相容れぬ、と洪庵は思った。
さりとて、もし自分を頼ってきたとしても、奉行所に申し出るつもりはなかった。

長英の気持ちは痛いほどわかる。

洪庵より六つ上だから今は四一。言いがかりに思える筆禍ひっかで六年以上も牢に繋がれては、將軍家斉死去いえなりに伴う恩赦ともなで、多くの罪人が赦免になったため、繰り上がって牢名主になったとはいえ、憂国の士にしてみれば我慢の限界だったのだろう。

ただし、同情と行動は別だ。

もし仮に長英と出くわすようなことになった時はどうすればいいか、いくら考えてみても、洪庵には答えは出せなかった。

幸い実際にはそうしたことは起こらず、杞憂きゆうに終わった。風の噂うわさでは長英は中国地方に落ち延びたとも、九州を周遊しているとも言われた。鳴滝塾なるたきじゆくの同窓このみやけいさくの二宮敬作を頼って四国の宇和島うわじまに行き、蘭癖大名べきの伊達宗城だてむねなりに重用されているとも聞く。

脱獄たてという、お上に楯突く行為といい、その消息が多々入り乱れている様といい、ある意味で神算鬼謀の高野長英の面目躍如めんもくやくじよたるものがある。

しかしこれで一層、蘭学に対する風当たりは強くなるだろうな、と洪庵はうんざりした。

ただでさえ蘭書の出版は難しくなり、ようやく書き上げた「病学通論」も刊行が滞あやまっている。

以前は町年寄、町奉行を通せば幕府の天文方の許可が下りたのに、突然きまりが変わって、漢方医の総本山である「医学館」へ申請することが必要になってしまった。このため漢方医が、翻訳書の刊行申請をことごとく握りつぶしている、と囁ささやかれていた。

だが適塾が繁盛すると、洪庵も公私共々、充実期を迎えた。

この頃の適塾では、天保十一年（一八四〇）に入塾して、塾生帳の第一号に記された有馬撰蔵ありま せんざうの評判が高く、億川百記は、八重やえの妹のおそとの婿むこにして、億川家を継いでもらいたいと考えていた。

しかし有馬撰蔵は、返事を濁して長崎留学へと旅立った。

長崎から届いた文には、長崎では牛痘ぎゅうとうの書を手に入れたので、帰国したら直ちに翻訳したい、という熱意溢れる文章に加えて、おそとの結婚を承諾しやうたかくする由よしが添えられていた。

その文を読んだ億川百記は、念願が叶って欣喜雀躍きんき せつやくした。

弘化三年（一八四六）一月、洪庵は父・惟因これより さんじゆの傘寿の祝いで故郷の足守を訪れた。

病弱な洪庵には重荷になった旅だったが、最後の親孝行ができて、満足もしていた。

翌弘化四年（一八四七）九月、父・惟因は八一歳だいおうじようで大往生した。

父の死を枕頭ちんとうで看取った洪庵は、翌年九月、父の一周忌に、足守藩の藩主の侍医となった。

その栄えある姿をひと目、父に見せたかった。

父の意に反して士分しぶんを捨て、医業に走った洪庵を、父はいつも温かい目で見守ってくれた。

今は天上から自分を見守っていてくれるように、洪庵には感じられた。

弘化四年春、一年の長崎留学から有馬撰蔵が戻ってきた。

最新の牛痘法の書を手し、その冒頭の翻訳を終えた彼は、誇らしげに師・洪庵に見せた。

そこに洪庵の義弟の緒方郁蔵おがたいくぞうがやってきて、その訳業を絶賛した。

「この本は直ちに全訳すべきです」

郁蔵がそう言ったので、郁蔵と洪庵、そして有馬撰蔵の三人で手分けして、翻訳する算段を整えた。

長崎では町年寄の高島秋帆たかしもしゅうはんが、私費で牛痘とうびょうの痘苗を取り寄せたものの、全て失敗に終わったという。その高島秋帆は今いまは微罪びざいでお咎めを受け、江戸送り十年の罪に処されている。

幕府の蘭学に対する方針は朝令暮改ちようれいぼかいで、迷走していた。

しかし病気は世の都合など考慮せず、待ったなしだ。それなのに

幕府の蘭学に対する態度は足を引つ張る方向に尽力し、蘭医学が達成している医術について、理解も導入もしようとしない。洪庵は、そんな世情に苛立いらだつしかない自分が、どうにも歯がゆくて仕方がなかった。

そんな暗い世情の中、長崎から牛痘の書を持ち帰った有馬撰蔵は、適塾にとって一筋の光明となった。

ところがその光明は突然、吹き消されてしまう。

八重の妹との婚姻の前に、京の親類のところを訪れた撰蔵は、夏の盛りの往来で、突然死してしまったのだ。

舅の億川百記の嘆なげきたるや、見るも哀れだった。

「この牛痘書の訳は、私と有馬の二人で成し遂げます。どうか私に預けてください」

強い決意を漲みなぎらせて洪庵に告げた郁蔵は、たちまちその書の翻訳を終えた。

その小冊子の冒頭には、有馬撰蔵が遺のこした文章をそのまま用いた。そこに郁蔵の想いが込められていた。

その後、郁蔵は、適塾の蔵書六冊の中から牛痘の記述部分を抜き出して編纂へんさんし、「散花錦囊さんかきんのう」として、「乾けん」「坤こん」の二分冊をまとめている。

それは後年、設立された除痘館じょとうかんで、公式の教科書として用いられ

ることとなった。郁蔵はそこでも、有馬撰蔵の序文を使い続けたのである。

弘化五年（一八四八）正月。父の喪に服していた洪庵の元に、佐賀藩で一代限りの匙医さじいに取り立てられたばかりの伊東玄朴いとうげんぼくが立ち寄った。

真冬というのに、流れる汗を手ぬぐいで拭き、いかにも暑そうな様子が不思議だった。

「この度はお国元くにもとの藩士が重病になり、拙者せつしやは西下を命じられた。拙者が脈を取っただけで軽快したが、褒美ほうびに金三百両分の書籍購入を許された。なので長崎に立ち寄り蘭書を見繕みつくりってきたのよ。鍋島なべしま直正なおまさ侯は英明なお方で、ついでに積年の悲願、牛痘の輸入をお願いしたら早速、出島でじまの蘭館に掛け合ってくれた。今度こそ牛痘を得られるやもしれぬ」

「それは素晴らしい。さすがは玄朴殿です」

かつてほんのわずかの間だけ師事したこともある師匠に、洪庵は心からの賛辞を言う。

「いやいや、いまや飛ぶ鳥を落とす西の大鵬たいほう、洪庵殿に褒められると、いささか面映おもはゆいわな。今回の件は先年、貴殿が訳した『牛痘法』を献上こうぜんしたのが功を奏そうしたやもしれぬ。その礼として、何冊か

蘭書を置いていくから、受け取ってくれい」

それを聞いて洪庵は複雑な心境になった。その書の翻訳に着手したのは今は亡き有馬撰蔵で、完成させたのは義弟の緒方郁蔵である。有馬撰蔵の遺作ともいえる「牛痘法」の書を、種痘の推進のために使ってもらえて、天の上で撰蔵もさぞ喜んでいることだろう。

しかしその一方で、洪庵は、権勢欲の旺盛な玄朴とはあまり関わりを持ちたくなかった。

江戸では玄朴の私塾である「象先堂」しやうせんどうに少し顔出ししただけで、「当塾の雪月花」せつげつかと言いつらされたのも、内心では不快に思っていた。

だが玄朴の政治的な振る舞いが蘭医の地位を向上させ、ひいては蘭学が受け入れられる素地を作っていることもまた事実で、貢献度から見れば、やはり玄朴は第一等の人物だった。

『毒も用いようでは薬になる、か』と洪庵は小声で呟いた。

「ところで先立ってお願いした、拙者の養子の玄敬げんけいを適塾に修学させる件、了解していただいたということでもよろしいのかな」と玄朴は切り出した。

「もちろんです。適塾は『来る者は拒まず』ですので。しかし当塾は完全な平等主義なので、いかに玄朴殿のご子息といえども特別扱いはいたしません。それでもよろしいのですか」

「構わん。むしろ厳しく扱ってもらいたいのだ。拙者の養子であることを鼻に掛け、増上慢ぞうじょうまんの気配が見えるのでな。こちらで天狗てんぐの鼻をへし折っていただけるとありがたい」

「左様さようですか。浪速は江戸以上に華やかで、遊興に事欠きません。

修学にはあまり適した土地ではないと思うのですが」

「墮落だらくしたらそれまでのこと。育たぬ苗なえは早めに間引くまで」と玄朴は冷ややかだ。

「それにしても、昨今の蘭学の隆盛は隔世かくせいの感がありますね。それも江戸で玄朴殿や箕作みつくりげん阮甫先生が、多くの翻訳を著してくださった成果でしょう」

伊東玄朴が蘭医界の巨頭なら、箕作阮甫は兵学や海防にも影響する分野の旗頭はたがしらとして、幕府への影響力が著いしい点で玄朴と双壁を成していた。

箕作阮甫は足守藩にほど近い津山藩つやまの藩医の家に生まれ、江戸に出て宇田川玄真うだがわげんしんに入門した。

江戸では洪庵も教こえを請うたことがある。その翻訳業は医学から兵学、地理学、歴史学へ広がり、後に設立される「蕃書調所ばんしよしよしんせう」の教授に任命されるなど、幕末の知識人の筆頭に躍り出ている。

面前で他の者を褒めると、とたんに機嫌が悪くなる玄朴だが、箕作阮甫のことは認めているらしく、上機嫌でうなずいた。それは阮

甫が幼い頃に怪我をして右肘が利かず、診療ができず著述翻訳を主にしていたため、医業中心の玄朴とは競合しないせいだろう、と洪庵は推察していた。

伊東玄朴は、胸焼けがするような暑苦しさで最新の蘭書を数冊、そして鍋島侯への牛痘要請という心を揺さぶる報せという、三つの置き土産を残して江戸へ帰っていった。

瓦町適塾で培った土台が、過書町適塾で花開き、洪庵の評価は日に日に高まっていく。

江戸の師の坪井信道まで、来年は適塾に養子を送りたいという。そんな風に、権威者からの信頼を得ていることは、誇りに思うべきなのかもしれない。

しかし、考え方や感じ方は人それぞれだ。自分なら信頼のおける人物に預ける点は同じだが、学業に専念できると人里離れた田舎で優れた師につけるだろう、と洪庵は思った。

その時に話題になった伊東玄朴の養子、玄敬が入塾してきたのは、半年後のことである。

十七歳の血気盛んな年頃で、月代を綺麗に剃り、旗本の若武者のような出で立ちで、下僕を連れてきた。いかにも権門の子らしい様

子である。

入塾に必要な請人は広瀬旭莊だ。日田に名高い漢学塾「咸宜園」を創設した広瀬淡窓の実弟で、和歌や漢文の素養が深く、「大坂咸宜園」を主宰していて、洪庵の無二の親友でもある。

束脩料（入学金）として洪庵に金二百疋（金二分、一両の半分、現代の四万円相当）を払う。他にも塾頭に金五十疋、塾中に金五十疋、洪庵の扇子代に銀三匁を必要とした。

だが伊東玄朴の養子は、その程度の支出は全く苦にならない様子だった。

蘭語は「象先堂」仕込みでピカ一だったが、門限破りを繰り返して、花街に入り浸るような問題児だった。そして最後には適塾を飛び出してしまふ。

その翌年には、坪井信道の長女と結婚して養子となった坪井信良も入塾してきた。

だが彼は病気になる、七カ月で退塾し、江戸に戻った。その後、信道の実子の信友も適塾に入門したが、怠け癖がひどく、一時破門されてしまった。

江戸の蘭学大家の御曹司は、かくも軟弱だったのである。だがそんな中でも謙虚に、ひたすら修学に励む養子もいた。

箕作阮甫の養子の菊池秋坪（後の箕作秋坪）である。彼は適塾に

馴染み、修学に励んだ。

そんな風にして、適塾は西の蘭学の中心地となっていた。

その頃、江戸から悲報が届いた。洪庵が深く敬愛していた坪井信

道が、かねてからの胃病で逝去してしまつたのだ。

洪庵はまたひとり、心の師となる人物を失つた。

弘化五年四月、改元して嘉永元年となつた。

嵐が吹き荒れる、嘉永時代の幕開けである。

豊かな家庭に生まれた子息が適塾での修学に挫折する一方、徒手空拳で石にかじりつくようにして学業の階段を這い上がっていく、貧しい者もいる。

嘉永二年（一八四九）のある日、適塾の門を叩いたのは、そんな青年だつた。

いや、その青年が「門を叩いた」というのは正確ではない。

彼は、道端で拾われて、適塾に連れてこられたのだ。

長州の萩出身の伊藤精一を拾ってきたのは洪庵の浪速の母、さだだつた。

久しぶりに適塾を訪れたさだは挨拶もそこそこに、いきなり、いつもの調子で、けたたましい早口でまくしたてた。

「章、けつたいな子を見つけてきたで。なにわ橋の真ん中で、ため

息をつき川面を見ておったんで、身投げでもするのかな、思うて声を掛けたら『適塾に入りたいけど、紹介人がいない』と泣きそうな声で、言うやないか。なんや、昔の章を思い出してな、取りあえず洪庵先生に直談判じかたんぱんしてみたらどうや言うて、引っ張ってきたんや。ほれ、先生にご挨拶せんか」

うなが促されて青年は小声でぼそぼそと言う。

「俺は学問が好きなのですが、父は萩の浜崎村の村医者なのでどうもならず、思い切って大坂に出てきました。片道の旅費しか持たず、今はすっからかんです」

洪庵は改めて、青年を見た。

破れた肩口、ほつれた袖そで。顔は埃ほじりだらけだ。丸顔で体型もずんぐりしている様は、どこか小ぶりの饅頭まんじゅうを思わせた。

年は二四だという。

これまでさぞ、悶々もんもんとした日々を送ったことだろう。

天游師匠てんゆうの風貌を思わせる、飄々ひょうひょうとしたところがあるような気もした。

——似ているところがあるような、ないような……

その身なりからも、束脩料すら納められないであろうことは、見ればわかる。

それは、若き日の私の姿だ、と洪庵は思う。

そして浪速橋の上で佇たたずんで、途方に暮れて合水堂を眺めていた、若き日の自分を拾い上げてくれたのは、他ならぬ天游師匠だった。

洪庵は即座に決めた。

「よろしい。入塾を認めましょう。束脩料の代わりに薪割まきり、風呂焚たき、お使い等、あらゆる雑事をやつてもらいます」

「あ、ありがとうございます」

伊藤精一は頭を畳たたみにこすりつけた。

洪庵は塾頭の村田蔵六ぞうりくを呼び、「新入の塾生だ。出身は萩だそうだから、お前と同郷だが、二四歳だそうだから、少し年上になるんだな。面倒めんどうを見てやってくれ」と命じた。

村田蔵六は長州出身で、日田の「咸宜園」で漢学を学んだ後、町人の蘭学塾「懷徳堂」から転入してきた変わり種だ。医学の造詣も深いきゆうりが、窮理学や兵術、砲術にも通じていた。

ふだんは口数が少なく物静かだが、道理が通らないと、顔を真っ赤にして激怒した。

感情の起伏きふくの激しさとその容貌ようぼうから、後に口の悪い高杉晋作たかすぎしんさくに「火吹き達磨だるま」というあだ名をつけられた。外見は老成していたが、実はこの時はまだ二一歳だ。

大きなさいづち頭をした蔵六は、精一の顔も見ずに、「こちらへ」とぶつきらぼうに言う。

伊藤精一は後に続き、急な勾配こうばいの階段を両手をつきながら上ると、小部屋に出た。

蔵六が「ここは『ゾーフ部屋』であります」と説明した。

精一が、置かれていた辞書を手に取ると、一冊は拍子木ひょうしぎほどの厚さがあった。

洪庵が長崎で筆写してきた「ゾーフ・ハルマ」は三千ページに五万語が収録されていて、背表紙に一卷が「A・B」、二巻が「C・G」、三巻が「H・K」、四巻が「L・N」、五巻が「O・S」、六巻が「T・U」、七巻が「V・Z」とある。

全七巻の大著の迫力に精一は圧倒された。

他にもウェイランドの「オランダ語辞典」全四冊もあったが、全てオランダ語で書かれていて、精一にはとても使いこなせそうにない。

他の塾生も同じらしく、その四冊は全く汚れていなかった。

『ゾーフ・ハルマ』は部屋から持ち出し禁止でありますおしぞと蔵六に告げた蔵六は、なおも続ける。

「通常の蘭医塾、たとえば齊藤方策先生の『藍塾』では初学者は『寒論』や『千金方』など漢方の古典を学んだ後に初めて、『解体新書』や『医範提綱』など蘭学の聖典を学びます。しかしわが適塾では、

漢方は一切読まず医学書、窮理（物理）、舍密（化学）、本草（薬学）

など西洋医学の基本学科を、全て蘭語の原書で読み通すのであります」

そして蔵六は「ゾーフ・ハルマ」の一冊を取り上げると、続けた。

「始めは『ガランマチカ（文法書）』で初歩を学び、続いて『セインタキス（文章構成法）』で学を深めるのであります。わからなければ

『和蘭文典前篇』と『和蘭文典後篇・成句論』という箕作阮甫先生

の翻訳があるので、参照します。この三点を学ぶために『ゾーフ・

ハルマ』という、この蘭和辞書を使うのであります。だから会読の

前は、この部屋では辞書の争奪戦になり、ごった返すのであります」

「ゾーフ・ハルマ」は多数の者が使うためか、手垢がついて汚れ、

頁が膨れて嵩を増していた。だが同時に、とても丁寧に扱われていることがひしひしと感じられる。

そこに塾生たちの学問に対する畏敬の気持ちが表れている気がして、精一は武者震いした。

そうしたやり方は、洪庵自らが長崎で語学力を向上させた手法を踏襲したものだだった。

けれども、そうしたことは蔵六も聞かされていない。

さいづち頭の塾頭は淡々と説明を続ける。

「他にもいくつか塾則がありますが、第一条『一枚たりともみだりに翻訳は許さず』というのが一番重要です。しかしながら初めのう

ちは、会談の課題を訳すだけで手一杯でしょうから、新入りが気にすることはないのであります」

その第一条は、高野長英の脱獄事件や蘭学禁止令など、蘭学に対する風当たりを強くしていたお上に、あらぬ疑いを掛けられぬために考え出されたものだった。

それは一種の韜晦とうがいであり、自衛策でもあった。

「他には、そんな規則があるんですか？ たとえば禁酒とか……」

精一がおずおずと訊ねると、蔵六は初めて、にこりと笑う。

「禁酒は無用なのであります。私の唯一の気晴らしは、一日中蘭学を学んだ後で、物干し台で夕涼みをしながら、豆腐さかなを肴さかなに一杯やることです」

精一はほっとした。彼も酒が大好きで、しかも大酒飲みだった。

「ここが、あなたの居室になります」

そう言つて村田蔵六は、隣に続く引き戸を開け放った。

三十畳じゅうじゅうの大広間には七、八名の青年がたむろしていた。ある者は文机ふづくえに向かつて書き物をし、ある者は蒲団ふとんに寝そべり天井を眺めている。彼らの視線が一斉に精一に注がれた。

蔵六は部屋の隅を指さした。

「ひとり分の割り当ては畳一畳で、そこに机、蒲団や身の回りの物を置くのであります。はみ出して他の者の迷惑にならぬように。あ

なたの場所は西側の階段脇で、夜は階下の雪隠へ行く者に枕を蹴られ頭を踏まれ、昼は蠟燭がなければ書も読めません。誰もが嫌がる悪い場所ですが、万事、成績順の実力主義で、会読でいい成績を取れば好きな場所に移ることができます。因みに夏は日陰になる北側、冬は日向になる南側の窓際が一等地なのであります」

側そばでにやにや笑いながら蔵六の説明を聞いていた、古参の塾生が言う。

「塾頭殿、ついでに会読の規則も教えてやってください」

「それはこれから、説明しようと思っていたところなのであります。修学を中心の会読は五日に一度、月に六回あり、級によって一と六の日か、三と八の日にやるのであります。塾生は指定された一章、もしくは数節を書き写し、『ツーフ・ハルマ』を使って訳すのであります。会読の日は塾長や上級生が会頭になり、塾生にくじを引かせて解読順を決めます。このとき、テキストは自力で訳さねばなりません。他人に聞いたら一級下のクラスに落とされます。会頭が順番と分担をくじで決め、最初の者から数行ずつ訳していき、正しく訳せたら『△』の『抜群』で、最も高く評価されます。意味がわからなさと『君の解読は意味不明だ』とされて、次の者が読みます。次いで文意や趣旨を討論し勝った者に『○』、負けた者に『●』がつかます。『△』は『○』の三個分の価値があるのであります」

「三角だけに三倍というわけたい。指定された箇所を訳し終えていないものは、目を瞑つむって、ひたすら早い順番が当たることば、祈るたい」

すかさず古参の塾生が茶々を入れると、蔵六はじろり、と横目で古参を睨にらむ。

彼は「おお、怖こわ」と言って肩をすくめた。

「そんなことにならぬよう、日々研鑽けんさんに励めばいいのであります。初級者は八級から始めて、オランダ語の文法を学ぶのであります。初級の初学者は誰に何を聞いてもよいのであります。これを理解すると七級になり。その級で三カ月、連続十八回の会読で全て『抜群』を取ると昇級できるのであります」

「級はいくつあるのですか」

怖おじ気づいた精一は、おそろおそろ訊ねる。蔵六は、明快に答える。

「級の段階は九級から一級までであり、一級の上には最上級があり、洪庵先生の講読を直々に聞けるのであります。大部屋の居場所は成績上位者から選ぶので、みな必死に勉強します。以上がおおまかな説明ですが、わからないことは、上位の者に聞いてください」

「あの、他の者に訊ねてはいけない規則だったのでは？」と精一は、おずおずと質問する。

「それは会読の時だけの規則なのです。他のことは何でも教えてくれるのであります」

「塾頭のおっしゃる通り、何でも聞くがよか。塾頭が説明しなかったことを、問わず語りで教えてやってもよかよ」

先ほど茶々を入れた古参の塾生はそう言うと、芝居がかった声で続けた。

「あ、さて、適塾での出世頭は大部屋を出て、隣の書齋をあてがわれる。そこは立派な部屋で、ゆつたりしていて過ごしやすく『清所しんじよ』と呼ばれとる。引き戸一枚隔てただけで、極楽行きと地獄の沙汰さたに別れるとは、ほんにこの世の習ならいばい」

蔵六はそのような芝居せりふつ気のある台詞には付き合わず、淡々と言う。

「その通りです。諸先輩を見習まなって、勉学に励んでください」

蔵六はそう言い残すと、襖ふすまを開けて隣の部屋に姿を消した。

古参の塾生が、精一に親しげに話しかけてくる。

「おいは肥前ひぜんの佐野栄寿さのえいじゆというもんだい。塾通いと女郎屋通いが趣味で、塾は佐賀の弘道館こうどうかんに始まり松尾塾では外科を学んできた。京都では広瀬元恭殿げんきようの『時習堂じしゅうどう』に入門してここに來たと。今は華岡はなおか流の『合水堂』にも通っている。もうすぐここをおさらばして江戸の『象先堂』に行くことにしとるたい。腰が落ち着かないとよく言

われるばってん、性分だから仕方なか。まあ、ほんの一時やが、仲良くやろうや」

この古参の塾生の佐野永寿は後に「象先堂」に移り、そこでも頭角を現す。だが志士たちと交わるうちに花街に嵌まり、借財を抱えた。そこで「象先堂」の「ゾーフ・ハルマ」を質入れて金三十両に替えて借財に充ててしまったため、玄朴に破門されてしまった。その時に常民と改名し、故郷に帰ると、佐賀藩の造船部門を担当し、戊辰の役での官軍の海軍勢力の基礎を作り、新政府に取り立てられた。

佐野常民は、明治十年（一八七七）の西南戦争で「博愛社」を興し、「日本赤十字社」の開祖となる。

新入りの精一は、佐野永寿に礼を述べると、指定された場所に座った。

精一は、すぐに周りと打ち解けた。適塾では、先輩が後輩を指導する。そして先輩は親切で、なにかと手取り足取り教えてくれた。まずは原書を写本する。和紙に滲み止めの明礬水をまぶし、鶴の羽の芯を削った。ペンに墨をつけて書く。一回の会読で必要な量は半紙三枚から五枚程度だ。

学問に休みはない。適塾では夜昼問わず、誰かが必ず勉強し、誰かが眠りについていた。

夜は百目蠟燭が乱立し、さながら春日神社の万灯籠まんとうろうのようだった。

適塾はまさに学問の殿堂、勉学の黄金郷だった。

不夜城ふやじょうの如き適塾さいだんの祭壇さいだんに祀られていたのは、学問の神々だった。

だが、真摯しんしに学に励む者がいる一方で、誘惑しんしの多い都会・浪速で、酒や女に溺れて墮落だらくしていく者もいる。血気盛けつきんな青年であれば、

やむを得ないことだった。

塾生は外から通う「外部生」と、塾に住み込む「内塾生」がいる。

裕福な伊東玄敬は、始めは塾に寄宿していたが、後に下宿を見つけてそこから通っていた。

住み込みの内塾生は毎月二朱しゆ（今の一万円くらい）の賄まかない料を払う必要があった。

賄まかないは一と六の日は難波煮なんばに、五と十が豆腐汁、三と八がシジミ汁と決められていた。

食事は各自、自分の茶碗に飯を盛ると、階下の板敷きの間で立ち食たいをする。

後に塾生の福沢諭吉ふくざわゆきちが「百鬼立食ひやうきりつしよく」と称した、適塾の象徴的な光景だった。

賄まかない料を納められない者には、仕事が斡旋あつせんされた。医家は、階下で薬を調合すれば塾費を免除された。洪庵こうあんの草稿そうごの清書せいしょという仕事は当然、字が達者な者が担当した。

そうした仕事の中には、導引術あんま（按摩）や義眼ぎがんの作成もあった。蘭書の写本は割がよかった。特に「ゾーフ・ハルマ」の筆写は人気があった。半紙一枚に三十行の横文字を筆写すると十六文、日本語の注まで写すと八文が上乘せされて二十四文になるので、毎日半紙十枚を写せば一カ月分の生活費が稼げたという。

外での飲み食いは気晴らしのひとつだ。安さが自慢の牛鍋屋ぎゅうなべが人氣で、難波橋南詰めと新町遊郭しんまちゆうかくの傍かたわらにあり、ごろつきと適塾生が上得意じょういさまだった。百五十文も出せば牛肉と酒で腹一杯になる。道頓堀どうとんぼりの芝居小屋に、同心どうしんや与力の恰好かっこうで入り只見ただみをする者もいて、それがバレて大事になり、洪庵が知り合いの与力に頼んで事を収めてもらったこともある。

そういう悪さをするのは不思議と、良家の子息で裕福な者が多かった。

人間、ゆとりがあると、ろくでもないことばかりを考えてしまうようになるものらしい。

市中で縁日があると必ず出掛けて行き、飲み食いをする。

市井しせいの民は、適塾生を見ると避けた。身なりがお粗末そまつで、浮浪者ふうろうしやのように見えたからだ。

また適塾生は、飯屋から茶碗や皿などを失敬する、こそ泥の常習犯だったので嫌われていた。

金がない塾生は、徳利とつくりで酒を買い、塾内で飲んだ。

勉学は嫌いだが、立身出世のために修学しようという者も多かった。そんな血気逸はやる若者たちが煮詰まると、諍いさかいになることもある。

どうにもならない貧しさ、空腹、底なし沼のような修学への畏怖いふ心など、出口のない鬱屈うつくつした想いを太い柱にぶつけることもあった。

塾生が寝泊まりし、勉学に励む大部屋の真ん中の大黒柱には幾筋かたなきずかの刀傷が残されている。

そんな風に揺れ動く塾生の気持ちをも、洪庵は何とかして勉学に向けてさせようと、意を砕くだいた。

けれども、口やかましく、怠け癖のついた塾生をたしなめる、といったようなことは、決してしなかった。

洪庵はあくまでも、塾生の自主性を尊重しようとしていた姿勢を崩さなかったのである。

二階の大部屋の北側の窓からは、中庭越しに、洪庵がいる居間の丸窓が見えた。

そこには夜が更ふけても、いつまでも灯りが点ともっていた。

師が遅くまで勉強している姿は、塾生を無言で叱咤しつたげ激励せきしているかのようなだった。

このようにして洪庵は、自分の背中を見せることで、塾生を教導しんたうしていたのである。

新たに入塾した伊藤精一は、学問に飢えていた。がむしやらに修学した彼は、みるみるうちに頭角を現し、適塾の雰囲気をも、変えていったのだった。

洪庵は塾を去る塾生には掛け軸を贈った。そこに自作の和歌を認めたり、医業において最も大切だと考えた「フーフエランド（扶氏）の「医訓」を書き綴った。それは故郷で開業する弟子にとっては、洪庵の免許皆伝を得たことを示すものと見做され、開業する役に立った。

また、洪庵は弟子に小まめに手紙を書いて、弟子からの質問に答えた。

師と弟子はこのように往復書簡で結ばれ、生涯交流を続け、相互に教育し合った。

故郷に帰り開業した弟子は、洪庵の分身であり、その地で洪庵の理想を実現するため奮闘する尖兵だった。

だから洪庵がそんな弟子たちを大切にしたのは、当然だったといえるだろう。

弟子に対する深い愛情が、塾生と洪庵の結びつきを深め、適塾の人脈を強固なものにした。

適塾生の評判は高く、塾頭にもなれば、たいてい諸藩からお召し

抱えの声が掛かった。

なので野心あふれる若者にとっては、途方もなく魅力的な場所になっていった。

また適塾には、人材同士をつなげ、情報を交換するネットワークという側面もあった。

それは後年、洪庵が実施する牛痘種痘術しゅどくの拡大に大いに役立ち、コレラの流行時などには、迅速な情報交換を可能にした。

そんな風にして、適塾は、やがて開国問題や倒幕活動とうぼくとも深く結びつき、時代の中心に位置することになっていく。

ただしそれは、決して洪庵の本意ではなく、喜びが半分、当惑が半分といったところで、痛し痒かゆしだったのではあるが……。

*

このように過書町に移ってから、適塾は更に栄え、毎年、優秀な塾生が塾生録に名を連ねた。

弘化三年には村田蔵六と伊東玄朴の養子の玄敬、弘化四年には江戸の蘭学の師、坪井信道の養子の信良、翌嘉永元年には武田斐三郎たけだ あやさぶろう、渡辺卯三郎わたなべ うさぶろう、佐野永寿、嘉永二年には村田蔵六が塾頭になり伊藤精一と菊池秋坪、橋本左内はしもと さないが入塾するなど、綺羅星きらぼしの如く人材が蝟集いしゅう

した。

それまで新入生は年平均二十人だったが、嘉永二年には二倍の四十人が入塾した。適塾の歴史を通してみると、弘化時代に漸増ぜんぞうした塾生は、嘉永年間に増大を続け、福沢諭吉や長与専齋ながよせんさいが塾頭を務めた安政時代あんせい（一八五四〜五九）の最盛期には、毎年三十名以上が入塾している。入門が最多だったのは安政六年（一八五八）の五十二人である。

そんな全盛期を迎える直前のこの頃、蘭学は猛烈な逆風に晒された。

嘉永三年（一八五〇）、幕府は蘭書の翻訳を完全に禁止したのである。

洪庵は、幕府の干渉がいずれ強まるのを見越して、それを忌避きひするため「第一条」の塾則を設けたのだ。しかしその一方で洪庵は、厳しい塾則で塾生の活動を縛ろうとはせず、他の塾にも自由に修学することを容認した。

江戸や京都の蘭学塾に移籍する時には、快こころよく紹介状を書いた。中には佐野永寿や橋本左内のように、掛け持ちで合水堂に通った猛者もさもいた。

適塾で蘭医学の理論を学び、合水堂で実践的な医術の華岡流外科を学ぶ、というわけだ。

だが、適塾と合水堂の塾生は、反目はんもくすることが多かった。

「合水堂」の塾生は裕福な侍医の子息が多く、身なりもきちんとしていた。

一方の適塾生は貧乏人がボロ服を着ていた。

そんな塾生同士が通りで遭遇そごうすると、「ころつきの蘭学」、「かび臭い漢方」と罵り合のしい、喧嘩けんかになることもしばしばだった。

だから「適塾」と「合水堂」を掛け持ちで通っていた佐野永寿や橋本左内などは、仲間内では「無節操漢むせつそうかん」とボロクソに陰口を叩かれていた。

若い頃「合水堂」に憧れた洪庵としては、いささか不本意な状況だったが、こればかりはどうにもならない。

そんな時、洪庵はひとりの医家の訪問を受けた。

着流し姿で、ふらりと立ち寄った男性を見て、洪庵は驚いた。

「これは南洋先生なんようではございませんか。今日はどうぞされたのです？」

「実は洪庵先生に、ご教示いただきました症例がありましたな」

「それでしたら、私が『合水堂』に伺うかがいましたものを。いつも手術が必要な患者をお願いしていたので、一度きちんとお礼を申し上げたいと思っております」

華岡青洲せいしゅうの婿養子で、一番弟子の華岡南洋は、「合水堂」再興の立役者である。

当時の適塾は評判が高く、隆盛を誇っていたとはいえ、やはり世の主流はいまだに漢方だった。

中でも「合水堂」は漢蘭折衷派として、飛び抜けた盛名を誇っていた。

その当主がわざわざ、洪庵を訪ねてきたのである。

洪庵はこれまで何度か、南洋を訪ねて教えを乞うていた。だが南洋が適塾を訪れたのはこれが初めてだった。

相談を受けた症例は慢性疾患で、洪庵は経験があつた。

なので処方を伝えると、南洋は礼を言った後に身を正し、改まった。

「わが華岡流の外科は長らく秘伝としていたんやが、間もなくこれを公開しようかと考えておるんや。それについて洪庵殿はいかがお考えか、伺いたいと思ひましてな」

「私は、誠に素晴らしいことだと思います。しかし、ひとつお聞きしたいことがあります。どうして今、突然そのような心変わりをされたのでしょうか」

「実は華岡流の秘奥は、すでに公開されておるんや。青洲先生の春林軒の門下生の本間棗軒殿が、天保八年（一八三七）に『瘍科秘録』全十巻を著しておる。シーボルト殿や杉田立卿殿にも師事した方なので、蘭流の考えがしみついていたのでしような。儂が、創立者の

鹿城先生亡き後、勢いが衰えた『合水堂』に派遣され、梃子入れを命じられた頃のことや」

「それは存じませんでした。その頃私は、長崎留学しておりましたので」

南洋はうなずいた。

「あの頃はとんでもないヤツだ、と師もお怒りになってはったが、最近の風潮を見るにつけ、もはや相伝の秘伝を守る時代ではなくなりつつあるやもしれず、棗軒殿は先触れのお方だったのやもしれぬ、と考えるようになりましてな。今では飛ぶ鳥を落とす勢いの水戸の烈侯の侍医に召し抱えられ、『西の華岡、東の本間』とまで称されておるそうや」

「左様でしたか。実は私は本道（内科）が専門で、外科には興味がない上、今の適塾は医学塾というよりも語学塾のようになっていまして、特に感じるところはありません」

その言葉を聞いた南洋が、呟くように言う。

「なるほど、そのような考え方の違いが、儂の『合水堂』と、洪庵殿の『適塾』の塾生たちの間の諍いの一因になっているやもしれぬな。一方で『合水堂』と『適塾』の両方に修学しようという猛者も出始めている。なのでそろそろ頃合いか、と思ったんや」

そうして南洋は一枚の紙を差し出した。洪庵は驚いて目を見開く。

「曼茶羅華八分、草烏頭八分、白芷二分、當歸二分、川芎二分、南星炒一分を細かく碎き熱湯に投じ、煮沸し数回攪拌、滓を除き温かいうちに服用すれば一刻半（三時間）で意識を失なう」という、秘伝の処方はその紙片には記されていた。

「これは……『通仙散』の処方ではありませんか」

華岡青洲が開発した麻酔薬の処方は、華岡流の秘中の秘だった。

「さつきも申し上げた通り、私は外科は不得手です。外科の患者はいつも、先生のところにお願ひしています。秘伝を受け継ぐには不適格かと」

すると南洋は首を左右に振った。

「せやからこそ、そんな洪庵殿に、この秘伝を受け継いでほしいんや。義父の青洲がこれを秘伝にしたのは、決して自分たちの利を守るためではなく、他の理由があつたんや」

「他の理由、と申しますと？」

「偽薬が回ることを防ぐためよ。そんなことになったら人命に関わる。華岡流外科の評価が高まれば高まるほど、そうした危険は高まる。そこでこれを秘伝とし、使用するには免許皆伝が必要としたんや。そのせいで権威主義だとか、儲け主義者などと、やっかみ半分が悪口が膾炙した。けど、もはや秘伝は秘伝たりえない時代になり、いくら宗家が偽薬だ、言うても、それは宗家の利のためだ、と

言われてまうんや」

南洋は吐息をついた。そして続ける。

「けど華岡流外科と縁が薄く、学術に厳しいという評判の洪庵殿が言えば、不埒ふらちな連中も畏れ入るやろう。つまり偽薬やエセ医師をのさばらせないための予防策なのや。公開は当分先になるやろうけど、そうなった時に、不逞ふていの輩やからを抑止するために、手助けをしてほしいんや」

「そういうことでしたら、喜んでお引き受けいたします。華岡流外科の秘伝、『通仙散』の処方、しかと受け取りました。天地神明てんちしんめいに誓って、この処方を濫みだりに公開はいたしません」

「頼みましたで。お上の權威が揺らいでいる今、医業まで無責任になつたら、泣かされるのは民草たみくさなのやから」

胸に残る言葉を残して、南洋は飄然ひょうぜんと立ち去った。

洪庵は、このことは自分にはさほど関係しないだろう、と思っ
いた。

しかし後に「除痘館」を設立した時に、南洋の考え方はとても役
立ったのである。

洪庵は南洋の思想を理解して尊敬し、南洋は洪庵の生き方を認め
ていることを、お互いに改めて認識した。

けれども残念ながらそんなことがあった後も、「合水堂」と「適塾」

の塾生同士の諍いがなくなることはなかった。

洪庵の家庭も円満で安定していた。

八重との仲も睦まじく、毎年のように子が生まれた。

この時代の常で天折した子ども多いが、嘉永二年までに四男三女が生まれ、長女の多賀、次男の平三、三男の四郎、次女の小睦の四人はすくすくと育った。

特に平三は腕白で、あちこちをうろついた。また塾生にもよく甘えた。

その頃、塾頭の村田蔵六は適塾を出てぼろ家を購入し、「漏月庵」という洒落た名をつけていた。平三はなぜか、敵めしい顔の蔵六に懐いて、おんぶをせがんだ。

そのため蔵六はしばしば、幼い平三をおぶって、町内をひとめぐりした。

蔵六は子守唄代わりに、オランダ語の冠詞の活用である「デス、デル、デム、デン」を、子守唄代わりのまじないみたいに口ずさんだので、いつの間にか、平三も覚えてしまった。

まさに門前の小僧、習わぬ経を読む、である。

子だくさんの上、適塾のおっ母さんとして大勢の塾生の面倒をみていた八重を助けるため、八重の父、億川百記はしばしば、孫たち

を名塩の実家に連れていった。それは百記にとっては、楽しい道楽だった。

他にも名塩の紙漉き職人木戸六三郎の娘のお鹿を、お手伝いに雇う口利きをしたりもした。

長身のお鹿は気立てもよく、しなやかな身のこなしでてきぱき家事を片付けた。

すっかり八重のお気に入りとなり、塾生にも人気があった。

中でも特に、ぶつきらぼうで素朴な精一は、同じ頃に適塾に来たということもあり、なんとなくいつも気に掛けていたので、ふたりはいつの間にか親しくなっていた。

百記なくしては、適塾が隆盛を誇ることはなかっただろう。

適塾の評判がよかった理由に、洪庵が奉行や与力に人気があったこともある。父・惟因の血を引いた洪庵は、人当たりが柔らかく交渉上手で、大坂町奉行の役人や浪速の豪商と如才なくつきあった。

裏表のない人柄を知ると、誰もが洪庵の味方になってくれた。

洪庵の傍らに寄りそう可憐な八重も、そうした人々から、ひそかな人気を博していた。

洪庵にとって唯一の本意だったのは、本業であるはずの医院があまり流行らなかったことだ。

後には塾生が代診するようになったが、普通の医家では弟子の代

診は歓迎されなかったのに適塾では逆に、患者は洪庵の往診を煙たがり、塾生の代診を喜んだ。

洪庵は実直すぎて、理詰めで病状を説明するので、却って具合が悪くなる、とある患者が代診の塾生にこぼしたこともある。洪庵自身も医業はあまり好きではなく、患者を診察する時間があるならその分、蘭書を訳していたい、と思っていた。

診察中も無意識にそんな本音がこぼれたため、患者は居心地が悪かったのかもしれない。

そんなところは師・天游にそっくりだった。

江戸の師でいえば、実際の臨床に重きを置いた坪井信道よりも、隠居して著述に集中して、臨床から距離を置いた宇田川玄真に近い立ち位置だったといえるだろう。

そんな風に公私共々、充実期を迎えていた洪庵に、ある日、天地を揺るがす朗報が届いた。

日本中の蘭医が待ち望んだ痘瘡のワクチン、牛痘苗が長崎で生着したというのだ。

——ついに来たか。

その報せを聞いてそう呟いた洪庵は、全身の血が沸き立つ思いがした。